

作物別技術交流集会報告

## お茶・にんじん

7月。静岡ではお茶、北海道ではにんじんの作物別技術交流集会が開催されました。それぞれに多くの参加者が集まり、栽培技術についての交流が進められました。

## Report

## お茶

## 夏から始まるお茶づくり

家計調査年報(平成12年)による緑茶の1世帯(3.3人)あたり年間購入量はなんと1.2キロ。日本人は緑茶が大好きなんです。しかし一方で、お茶は一般的に農薬・化学肥料を大量に使う作物でもあります。7月27日、静岡県の富士山のふもとにお茶の生産者11人が集まり、お茶の作物別技術交流集会が開催されました。

## ■自然仕立て

今回1日目は佐野製茶の佐野元彦さんの紹介により、小林園・小林由秋さんの茶園を見学しました。

小林さんの栽培方法は「自然仕立て」と呼ばれる仕立て方が特色です。ふつう茶樹の仕立て(整枝)は機械での収穫にあわせてかまぼこ型に整えていきますが、我々が見に行った7月時点、小林さんの茶樹は自由奔放。春に新芽を摘み取り、その後ひざ位まで刈り取って次年まで再び伸ばします。胸ぐら位の高さになった茶樹から若返った枝が新しい養分を蓄え、樹を無理なく育て、ハサミでは刈れないので全てが手積み。

数々のお茶の品評会で入賞している小林さん。樹勢を活かしたこの方法は人手や費用の問題があるものの、



「自然仕立」。無農薬に取り組むらでいっしゅの生産者さんにはかなりの労力を要するそう。

「おいしいお茶」を求める栽培技術の一手法、ということができそうです。

寺社畑園・岩崎光雄さんも茶

園の一部で自然仕立てを進めています。「自然仕立ては良い味が出るが、労力の問題がある。多少なりとも農薬を使う小林さんと、無農薬に取り組む我々では求める道が違う」とのお話も。

## ■前年からの蓄えが必要

それではもう一度、無農薬栽培を前提としたお茶栽培の基本を確認していこう、と今回もジャパンバイオファームの小祝政明さんが登場です。

春の芽だしは春の肥料だけでは手遅れとの話。茶樹は幹や根に前年から蓄えられた養分を使って、春に葉が作られます。その養分を蓄える上で重要な働きをする根は、7割以上が8月から11月までの間に形成されるので夏場からの管理が翌春の収穫のキーポイント、ということになります。

そこで「断根」という技術のお話。これは根が伸びる前8月の深耕により畝下の古い根を切断することで、新しい細根の生育を刺激し、新しい根による活発な養分吸収を期待する技術です。若い樹では必要ないそうですが、根を若返らせることができるとのこと。断根は8月いっぱいか時期で、根に養分が貯蔵されてから切るのは遅すぎ。みかんでも使われている技術とのことです。



参加者のお茶の試飲。どれがで自分のお茶が当てて頂きました。(みなさん正解。スゴイ)

## ■春の有機ボカシ

私たちは茶葉にアミノ酸が多く含まれるとおいしく感じます。茶葉の細胞中のたんぱく質は分解するとアミノ酸になりますが、たんぱく質では味は感じられない。そこで茎葉の形成(たんぱく質合成)を前年からの蓄えで賄い、新芽の味は春の施肥で補う、二段構えの施肥技術が求められます。

すなわち夏場からの管理を基本としてしっかりこなしうえて、春の施肥で吸収しやすいアミノ酸が供給できれば、葉の形成と味の向上の養分補給が両立できるのです。

有機だとボカシの段階でアミノ酸を作っておくと供給に使えます。見極めはアンモニア臭が出たぐらいがアミノ酸量の高い状態。これを過ぎるとアンモニア・硝酸にまで分解してしまいます。分解のしすぎは、これを吸収する茶葉にまで余分なエネルギーを消費させてしまいます。

## なかなかおっくうな土壌分析

土壌分析の重要性はいまや誰もが認めるところ。これまで培ってきた有機農業の経験とカンに、客観的な数値が加わればまさに鬼に金棒です。ね。

ところがこの土壌分析、地元の普及所や農協、研究機関など、やってくれるところがあるのは知っているけどなかなかおっくうなもの。せっかく土を採取しても分析の順番待ちで種まきに間

に合わなかったり、畑のクセごとに細かく分析するには費用がかさんでしまったり、無料でやってくれる場合など、かえって遠慮して分析先に要望どおりのことをしてもらいづらかったり……。

らでいっしゅぼーやは9月より、簡易土壌分析キット「Drソイル」(富士平工業(株))のRadix会員向け販売を開始。同時に事務局で購入者補助を実施します。